

さっぽろで国際雪像コンクールに参加して マルタ・チフィクリンスカ

札幌に来る前は、どんな体験ができるのか全く想像もつきませんでした。数か月前までは、こんな機会が訪れるなんて夢にも思いませんでした。9月、東京のポーランド広報文化センターから公募に関するメールが届きました。センターは、第76回さっぽろ雪まつり国際雪像コンクールでポーランド代表となるプロジェクトを募集していました。公募の唯一の条件は、雪像製作の経験があることでした。当時の私たちに経験はありませんでしたが、日本を訪れることは長年の夢でしたので、それは問題ではないと考えて、木や大理石など他の素材を使った彫刻作品を載せたポートフォリオへのリンクを添えて、プロジェクトを提出しました。



「2026年～アンジェイ・ワイダの年」と題した作品は、ポーランドを代表する映画監督の一人、アンジェイ・ワイダが古いカメラのレンズを通してこちらを見つめている様子を描いています。このプロジェクト



は、ワイダの生誕100周年と没後10周年にあたる2026年をワイダに捧げるものでした。ワイダと

日本との繋がりを知っていたので、私たちはこのテーマが非常にふさわしいと考えました。そして見事に国内コンテストで優勝し、目標素材である雪で彫刻を製作できることになりました。

札幌の駅を出るとすぐに、大量の雪、凍った道路と雪の吹きだまりに目を奪われました。後で分かったのですが、札幌では何年もこれほどの大雪はなかったそうです。本当に美しく、私たちは大いに楽しみました。しかし雪像製作の経験がなかったため、作業中にそれがどのような意味を持つのかは分かりませんでした。

すぐに天候はとても良いことが分かりました。寒くても思ったほどではなく、気温がプラスになったのはたった1日だけでした。しかしその日は、彫刻が溶けてほしくないところまで溶けてしまい、気温が氷点下になると、氷のような質感になってしまうのでした。一番大変だったのは夜、特に最後の夜で、気温が最も低くなり、雪が降り、風が吹き荒れました。この夜は一番大変そうでしたが、尾形さんからカイロをいただいたおかげで、私たちにはそれほど酷くはありませんでした。尾形さんには改めて心から感謝申し上げます!

尾形芳秀さんはコンクールの5日間、毎日私たちに訪ねてくださり、上で述べたカイロなどのプレゼ

ントを持ってきてくださっただけでなく、私たち全員の写真を撮って手紙も書いてくださったのです。手紙には、温かい言葉、北海道ポーランド文化協会についての情報、ポーランドと日本の関係の歴史、地元の重要な名所について記してありました。



そうした訪問は私たちにとってとても大きな意味がありました。思いがけない支援者や、尾形さんのような親切な方にお会いできたことは本当に素晴らしい経験でした。

また、安藤厚氏にもお会いする機会があり、興味深いお話を聞かせていただき、大変感銘を受けました。安藤氏はとても親切にくださり、心から感謝しています。

滞在中は、日本国内や世界中からの、たくさんの素敵な方々に出会うことができました。他のチームの皆さんもとても親切で社会的で、多くの方と友達になりました。雪像の作り方をたくさん教えていただき、道具も貸していただきました。このフェスティバルで得た友情と経験のおかげで、来年もぜひ参加したいと思っています!

(Marta Ćwiklińska, ASP w Warszawie ワルシャワ美術大学、安藤厚訳)

写真(右上)ポーランド雪像チーム =右より=マルタ・チフィクリンスカ Marta Ćwiklińska, カツペル・ブラフ Kacper Brach, カタジナ・キェウチェフスカ Katarzyna Kielczewska, 左端(上)尾形芳秀(下)安藤厚 (撮影 尾形芳秀)